

精神科入院患者の地域移行支援に携わる看護師の支持的関わりー地域移行支援に成功したK氏の事例を通してー

山田史穂、佐藤純子、金谷光子

新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】2004年に厚生労働省が発表した「精神保健医療福祉の改革ビジョン」に則り、精神科の入院患者が地域で暮らせるように支援する地域移行支援に重点が置かれている。精神障害の中でも、とりわけ統合失調症は多重な症状を持ち地域で暮らすことに困難を抱えている。今回、統合失調症と神経発達障害の二重の障害を抱えたK氏の地域移行支援を通して、看護師の支持的関わりの在り方を考察した。そこで、本研究は、地域移行支援を成功に導く患者-看護師関係にどのような構造があったのかを明らかにすることを目的とした。

【方法】研究デザインは質的帰納的研究である。A病院にて、本事例に数年にわたって関わった2名の看護師によるグループディスカッションを90分程度行った後、逐語録を作成し、その語りから類似性を尊重してサブカテゴリーを抽出し、さらにそれを抽象化してカテゴリーとした。本研究は、新潟医療福祉大学倫理委員会の承認を得た。(18024-180710)

【結果】研究対象者の2名いずれも男性看護師である。1名は当時、病棟看護部長をしていた精神看護経験25年のベテランであり、もう一人は当時看護師1年目の受け持ち看護師であった。K氏(男性)への退院支援は通年6年に渡った。抽出された結果は表1のとおりである。

表1

カテゴリー	サブカテゴリー
患者のありのままを見る力	K氏をありのまま受け入れようとする
	K氏のストレングスを見つけ出す
	K氏の自己決定を尊重し、支持し続ける
待つ力	患者のペースに合わせてながら、ゆっくりと時間をかける
	患者を見守り、患者から看護師に歩み寄ってくれる時期をひたすら待つ
同じ方向を見る力	患者の隣で同じ方向を向いて、一緒に考えていく
	患者の行動・言動から看護師自身が学びを得て成長する
自己開示する力	(看護師も)自分のことを知ってもらおうとする

	(看護師の)経験不足から生じる不安や恐怖を受け入れ、患者の前でも戸惑う様子を隠さずに表出する
成功体験に結びつける力	患者を否定せずに肯定し続ける
	失敗経験を否定的なものとして植えないケア
EBM(Evidence-Based-Medicine)とNBM(Narrative-Based-Medicine)の両方の視点を持ち合わせる力	医療的な知識を常に学んでいく
	医療者という立場を超え出でる
地域と病院を結びつける力	退院後の患者の生活に合わせたケア
	患者が地域に退院することを見据え、患者が住む地域の環境を整える
	退院から地域への流れの中での継続した看護
包容力ある病院の力	看護管理者による自由性のある看護ができる病棟の雰囲気やシステム
	看護師と患者両者へのサポート体制を整える師長
	モデルを見せてくれたスタッフ
	看護の方向性をフォローしてくれるスタッフ

【考察】今回の退院支援における患者-看護師関係は、ペプロウが述べている患者-看護師関係の発展段階と類似していた。K氏と看護師たちの出会い、その後のK氏の反発等、互いに影響を及ぼしあいながらも両者が同じ方向を見つめ、やがてK氏が看護師から離れ自立していくまでの長期にわたった関わりが展開されていた。このプロセスでは、看護師たちがK氏の強みと自己決定を徹底して保証していたことが特徴的であった。

また、根拠と照らし合わせるEBMの視点のみならず、K氏が持つ物語に目を向けるNBM、つまりK氏を理解するために医療者の立場を超え出でようともかく看護師たちの努力や成長を見ることが出来た。

さらに、看護師自身の経験不足から生じる不安を素直に“自己開示”できたことは、K氏にとって共に悩みながら自分と同じ方向を見ようとする看護師たちへの信頼にも繋がったのではないだろうか。

いずれにしても“包容力ある病院の力”は、患者-看護師関係に大きな影響を及ぼすことが理解できた。

【結論】看護師たちは、患者の持つ強みを肯定し続け、支援の際の自身の不安も患者に自己開示しながら、またEBMとNBMの狭間で揺れながら支援していた。さらに地域で生きようとする患者と同じ方向を共に見据えながら支援していた。